

CONTENTS

●年次報告書の刊行にあたって	2
■特別講義・講演会	
「キャンディダ・ロイヤルと性の革命」	6
「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」	9
■シンポジウム	
「ファッションにおける失敗—ジェンダー、そしてデザインの否定芸術」	14
「科学の世界をフェミニズムがひらく？—フェミニズム科学論の可能性と課題」	18
■他機関との連携・協力	
後援「国際日本学部特別講義 全5回『ケアとジェンダー』」	23
■研究プロジェクト	
A「企業のダイバーシティ推進の実態調査」	26
B「欧州におけるファッション（服飾流行）とジェンダー表象に関する考察」	27
C「生殖技術の進展と女性アスリートのライフコース変容」	28
D「ジェンダー・ノンコーフォーミングをめぐるパフォーマンス・アートの 電子アーカイブ化」	29
■業績一覧	
ジェンダーセンター運営委員業績一覧	31
●ジェンダーセンター運営委員一覧、ジェンダーセンター運営委員会会議録	36
●編集後記	37

年次報告書の刊行にあたって

世界経済フォーラム（WEF）が毎年実施している「Global Gender Gap Report」（世界男女格差報告書）の2023年版が昨年6月に発表され、日本のジェンダーギャップ指数は146カ国中125位と、2006年の同調査公表開始以来最低ランクに転落しました。ジェンダー平等や女性活躍といった掛け声は各所で聞かれるものの、実態は伴わず日本社会における男女格差は一向に改善されていない状況であることが示される形となりました。

このような閉塞的な状況を容易に解決することはできませんが、ジェンダーやセクシュアリティにとらわれない公正な社会の実現を目指すべく発足した本センターにおいては、学内外に向けジェンダーに関連する研究プロジェクトの実施や、学術的な知識の伝播を意図した啓蒙活動を通して、より積極的にその責務を果たしていくことが求められていると自覚しなければなりません。

今年度の活動を振り返りますと、歴史的、科学的な観点からのフェミニズム理論の再考に関する研究会、企業経営や産業構造におけるジェンダー問題を扱った企画、ケア労働から見たジェンダーについて考える会の計5つを対面形式（一部オンライン）で開催いたしました。まず、今年度最初の企画としては、6月に『キャンディダ・ロイヤルと性の革命』と題して、女性蔑視の象徴として捉えられることが多いポルノグラフィについて再考する機会を提供しました。登壇者には、1960年代から70年代にポルノ女優として活動し、1980年代に映画制作側に転じてフェミニスト的ポルノ映画の制作会社を起業したキャンディダ・ロイヤル(Candida Royale, 1950-2015)氏の研究に携わり、来春伝記を刊行予定のジェーン・カメンスキー教授をお招きし、ロイヤル氏の取り組みを振り返りながら1960年代以降のいわゆる「性の革命」とは何であったのかを立体的に理解し、フェミニズムとポルノグラフィの真の関係性を問い直すことを試みました。続く10月には、今回でシリーズ7回目となる『企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント』、11月には、『ファッションにおける失敗—ジェンダー、そしてデザインの否定芸術』を開催し、企業組織内や、産業界におけるジェンダー問題を中心に議論を行いました。前者においては、“ダイバーシティ・マネジメント”に積極的に取り組む企業のトップとして、MPower Partners ゼネラル・パートナーのキャシー松井氏と、コモンズ投信株式会社 代表取締役社長 兼最高運用責任者の伊井哲朗氏をお招きし、経営者としての目線で女性活躍をはじめ人材多様性を促進する意義や課題について忌憚のない議論が展開され、後者では、ニック・リーズ＝ロバーツ氏を招聘して、デザイナーやクリエイティブ・ディレクターとブランドとの間の権力闘争や緊張、デザイナーとブランドとの間の適合と不適合の問題についてジェンダーの視点から考察を行いました。また、12月には『上野千鶴子先生特別講義（全5回）「ケアとジェンダー」』を後援し、日



本における女性学の第一人者でベストセラー『おひとりさまの老後』などの著作がある上野千鶴子先生をお迎えして、「ケアとジェンダー」の問題を考えました。そして、今年度最後は、『科学の世界をフェミニズムがひらく？—フェミニズム科学論の可能性と課題』をテーマに、現代の科学においてなぜフェミニズムの視点が重要なのか、哲学、人類学、社会学の三つの学問分野から議論し、「フェミニズム科学論」の可能性と課題について広く検討する企画をオンラインで実施いたしました。

以上の通り、今年度は対面を基本として全イベントを滞りなく実施することができました。これもひとえにセンターの活動を日頃から支えてくださっている学部内外の運営委員の先生方や、学部事務スタッフの服部さん、専門事務スタッフの臺さん他、関係各位のご尽力の賜物であると存じます。皆様のご支援やご協力に深く感謝申し上げます。また、当センターの活動に関心をお示しくださり、イベントにご参加くださった皆様に対しましても、心からお礼を申し上げます。

今後も当センターの活動がさらに有意義なものとなるよう励んで参ります。どうぞよろしくお願いたします。

2024年2月29日

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長
牛尾奈緒美

 特別講義・講演会

特別講義

キャンディダ・ロイヤルと性の革命

【登壇者】

ジェーン・カメンスキー氏 (ハーヴァード大学教授)

【略歴】 ジョナサン・トランブル記念米国史講座教授。ブランダイス大学・ブラウン大学教授を経て現職。主に革命期のアメリカ合衆国史に関する著書・論文多数。アメリカの女性の歴史に関する一次史料を収集する最大規模の史料館であるシュレジンジャー図書館の館長も務める。主著に *The Exchange Artist: A Tale of High-Flying Speculation and America's First Banking Collapse* (Viking, 2008), *A Revolution in Color: The World of John Singleton Copley* (W. W. Norton, 2016) など。

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【共催】 アメリカ学会、アメリカ歴史学者協会 (Organization of American Historians)

【後援】 日米友好基金 (Japan-U.S. Friendship Commission)

【日時】 2023年6月8日(木) 18:00~20:00

【会場】 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー1133教室

【担当運営委員】 高峰修 (明治大学政治経済学部教授)

【司会】 兼子歩 (明治大学政治経済学部准教授)

【使用言語】 英語

【来場者数】 31人



質問に回答するカメンスキー氏



報告：兼子 歩

1950年代の冷戦下における同調圧力の時代を経て、1960年代は旧来的な秩序に対して異議を申し立てる多彩な社会運動が興隆したが、(第二波)フェミニズムやゲイ解放運動はその代表的な運動のひとつであった。1970年代には、ラディカル・フェミニストのなかから、ポルノグラフィが女性の男性に対する従属を創出し維持する根本的制度であると主張する反ポルノ運動が勃興する。他方には保守的なキリスト教道徳を掲げた右派勢力が、セクシュアリティを統制する目的から反ポルノを主張し、一部フェミニストと保守派が反ポルノで連合する状況も生まれた。

カメンスキー教授は、この1960年代から70年代にポルノ女優として活動し、1980年代に映画制作側に転じてフェミニスト的ポルノ映画の制作会社を起業したキャンディダ・ロイヤル(Candida Royalle, 1950-2015)の伝記を来春に刊行予定であり、本講義ではその内容を紹介した。カメンスキー教授によれば、ロイヤルは反ポルノと搾取的なポルノ産業という二極とは異なる路線を目指した人物であり、彼女の取り組みを知ることは1960年代以降のいわゆる「性の革命」とは何であったのかを立体的に理解するために有益であるという。ロイヤルは少女時代から詳細な日記を継続的に記しており、他の文書と合わせて膨大な個人文書が死後にシュレジンジャー図書館に収蔵され、現在ではそのほとんどが公開され、ウェブ上でカタログも閲覧することができる。ロイヤルの個人文書からは、セクシュアリティを搾取する性産業に対する彼女の感情、家族関係の複雑さ、自己探究をめぐる彼女の苦悩や葛藤、制作会社の社長としての資金のやりくりなど、彼女のさまざまな側面をうかがうことができるが、カメンスキー教授はそうしたパーソナルな葛藤や苦闘を戦後のアメリカの社会・文化・政治・経済の歴史という文脈を理解するための窓として理解することの重要性を指摘した。

講演後の質疑応答におけるカメンスキー教授の丁寧な回答を通じて、ロイヤルとその時代に関する議論はさらに深められた。ロイヤルのポルノ制作の特徴——射精を映さず、女性の物象化を回避するために性器に焦点を当てず、性交の前後のコミュニケーションのシーンを重視した編集をおこなうなど——についての議論が深められた。また、ロイヤルは散発的に公民権運動やベトナム反戦のデモに参加したことはあるものの私的には非白人やユダヤ系などへの蔑視的発言が時折見られたこと(1950年にカトリックの白人労働者階級家庭に生まれ育ったことの影響は少なくないとカメンスキー教授は指摘する)、アフリカ系アメリカ人の監督と俳優を起用した作品が売り上げでは失敗したこと、ロイヤル制作のポルノは基本的にロマンティックで中流層的リスペクタビリティを保つ異性愛の男女を主人公としたものであり、また視聴者もおもに白人で中流層の異性愛主義の夫婦・カップルが念頭に置かれていたこと、それゆえにヘテロノーマティブな前提が彼女のポルノには反映してい

たこと（ただしカメンスキー教授は今日生きていれば、彼女の記録に残る言動から、同性婚の合法化は支持したであろうと推察している）など、ロイヤルと彼女の作品がもっていた時代的な限界もまた、質疑を通じて浮き彫りにされた。

ポルノをめぐる政治が、ジェンダーとセクシュアリティのみならず人種や階級といった諸要因が交錯する地点において作用するものであることを、カメンスキー教授の講演と質疑応答があらためて明らかにしてくれたと言えるだろう。

本講演の参加者には本学学部生が多かったが、通訳を入れず英語のみでのイベントであったにもかかわらず、学生たちから非常に積極的に質問が寄せられ、当初予定の時間をオーバーするほどであり、学生たちのジェンダー・セクシュアリティをめぐる諸問題に対する関心の高さが表れていた。

キャンディダ・ロイヤルと 性の革命

司会・コーディネーター：兼子歩
(政治経済学部准教授)

担当運営委員：高峰修
(政治経済学部教授)


使用言語：英語 ※通訳無し

一般的なイメージでは、フェミニズムとポルノグラフィは相反するものと考えられている。事実、ほとんどのポルノグラフィは女性を蔑視するものであったし、ポルノグラフィ批判を訴えたフェミニスト理論家や活動家も少なくない。しかし、ポルノグラフィは女性を解放するものにもなりえると考えたフェミニストたちも存在する。

本講演は、アメリカでポルノ女優から転じてフェミニスト・ポルノグラフィ制作会社を立ち上げたキャンディダ・ロイヤル (Candida Royalle, 1950-2015) をとりあげ、彼女が 1960 年代以降の「性の革命」をどう生き、何を变えようとしたのかを明らかにする。ロイヤルの取り組みを知ることは、フェミニズムとポルノグラフィの関係をめぐる議論に一石を投じることになるだろう。

講師

Dr. Jane Kamensky



Harvard University,
歴史学
主要著書: "Candida Royalle and the Sexual Revolution: A History from Below" (2023, forthcoming; W. W. Norton)
"A Revolution in Color: The World of John Singleton Copley" (2016; W.W. Norton)
"The Exchange Artist: A Tale of High-Flying Speculation and America's First Banking Collapse" (2008; Viking/Penguin)
"Governing the Tongue: The Politics of Speech in Early New England" (1997; Oxford University Press)

6/8 (木)

17:30 開場 18:00 開講

明治大学 駿河台キャンパス
リパティタワー13階 1133 教室

参加無料・事前登録

下記URLまたはQRコードからお申込みください。
参加申し込みフォーム
<https://forms.office.com/r/h8Gx6vxWR3>

タイムスケジュール

18:00	開会挨拶
18:05	講演会
18:50	休憩
18:55	質疑応答
20:00	閉会

※終了時間は前後する可能性があります。

主催 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
後援 アメリカ学会および Organization of American Historians
助成 日米友好基金

特別講義

企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント

【登壇者】

キャシー松井氏 (MPower Partners ゼネラル・パートナー)

【略歴】 ゴールドマン・サックス証券会社、元日本副会長およびチーフ日本株ストラテジスト。1999年に提唱した「ウーマノミクス」の概念はその後広く世界に浸透し、日本政府も女性活躍推進を経済成長戦略として打ち上げるに至った。多様性、コーポレートガバナンスと持続可能性を経済合理性の観点から分析し、多くの企業や投資家に影響を与えている。2020年に『女性社員の育て方、教えます』を出版。ハーバード大学、ジョンズホプキンス大学院卒。

伊井哲朗氏 (コモンズ投信株式会社代表取締役社長兼 最高運用責任者)

【略歴】 山一証券入社後、主に営業企画部に在籍し営業戦略を担当。その後、メリルリンチ日本証券 (現三菱UFJモルガン・スタンレー証券) の設立に参画し約10年在籍。コモンズ投信創業と共に現職。2012年7月から最高運用責任者兼務。同社は、骨太な長期投資家として特色がありコモンズ30ファンドは、アワード受賞多数、つみたてNISA対象ファンドにもなる。上場株のインパクトファンドも手掛ける。BSテレビ東京「日経プラス9」レギュラーコメンテーターを務めるなどメディア出演多数。

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2023年10月23日 (月) 15:20~17:00

【会場】 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー1156教室

【ファシリテーター】 牛尾奈緒美 (情報コミュニケーション学部教授、ジェンダーセンター長)

【来場者数】 100名

報 告：牛尾 奈緒美

2023年10月23日、本センター主催により、特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」を駿河台キャンパス内リバティータワー1156教室で実施した。この講演会は企業経営者などを招き、本センターが定期的で開催しているもので、今年で6回目を数える。今回はMPower Partners ゼネラル・パートナーのキャシー松井氏と、コモンズ投信株式会社代表取締役社長兼最高運用責任者の伊井哲朗氏の2氏をゲストに迎え、両氏による講演と、筆者を交えたディスカッション、参加者との意見交換が行われた。

松井氏は、ゴールドマン・サックス証券（GS）で副会長などを務め、「ウーマノミクス」を提唱したことで知られる人物である。当レポートは2013年以降の日本政府の掲げる「女性の輝く社会」を推進するための政策策定に大きな影響を与えてきた。GS退社後は2021年にベンチャーキャピタルファンド立ち上げ、スタートアップ支援の観点にダイバーシティ経営の推進を加えるなど独自の事業を展開している。これらの経験の中から、「日本のジェンダーランキングが低いままなのは、政治と経済のリーダー層に女性が少ないから。多様性がある企業はROEと収益性が上がる」とダイバーシティ・マネジメントの重要性を指摘した。

伊井氏は、山一証券で営業戦略を担当し、退社後はメリルリンチ日本証券、三菱UFJメリルリンチPB証券を経て、コモンズ投信の創業に参画し現職に至っている。講演では、「パーパス経営が日本の大企業にも増えてきた。あらゆるステークホルダーを考慮できる企業は、長期の外部環境の変化に耐えられる」と主張した。その後、参加者との質疑応答が行われ、学生たちからは、実際の金融市場で投資家からのダイバーシティ経営の要請がいかにか高まっているのか、女性管理職比率の拡大が現代の経営にとってどれほど価値のあるものなのか、など質問が寄せられ、本会は立ち見が出るほどの盛況のうちに終了した。



講演する松井氏



講演する伊井氏



牛尾ゼミ一同と、
(前列左から) 伊井氏、牛尾教授、松井氏

企業トップの考える ダイバーシティ・マネジメント

10/23 (月)

15:00開場 15:20開講

明治大学 駿河台キャンパス
リハビリタワー15階
1156教室

ファシリテーター：牛尾奈緒美氏
(情報コミュニケーション学部教授
ジェンダーセンター長)

参加無料・事前登録
URL またはQR コードから
お申込みください
<https://forms.office.com/r/77pTwbdaMx>

牛尾奈緒美氏
情報コミュニケーション学部教授
ジェンダーセンター長
慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程修了。1996年明治大学専任講師就任。2003年助教授。2009年より教授。2016年～20年明治大学副学長。専門は経営学、人的資源管理論。企業における人材活用問題をジェンダーの視点から分析。著書『女性リーダーを育てるしくみ』(中央経済社)『ラーニング・リーダーシップ入門』(日本経済新聞出版社)ほか多数。

キャシー松井氏
MPower Partners
ゼネラル・パートナー
ゴールドマン・サックス証券会社、元日本副会長およびチーフ日本株ストラテジスト。1999年に提唱した「ウーマノミクス」の概念はその後広く世界に浸透し、日本政府も女性活躍推進を経済成長戦略として打ち上げるに至った。多様性、コーポレートガバナンスと持続可能性を経済合理性の観点から分析し、多くの企業や投資家に影響を与えている。2020年に『女性社員の手育て方、教えます』を出版。ハーバード大学、ジョンズ・ホプキンス大学院卒。

伊井哲朗氏
コモンズ投信株式会社
代表取締役社長兼最高運用責任者
山一證券入社後、主に営業企画部に在籍し営業戦略を担当。その後、メリルリンチ日本証券(現三菱UFJモルガン・スタンレー証券)の設立に参画し約10年在籍。コモンズ投信創業と共に現職。2012年7月から最高運用責任者兼務。同社は、育太な長期投資家として特色がありコモンズ30ファンドは、アワード受賞多数。つみたてNISA対象ファンドにもなる。上場株のインパクトファンドも手掛ける。BSテレビ東京「日経プラス9」レギュラーコメンテーターを務めるなどメディア出演多数。

タイムスケジュール

15:20	開会挨拶
15:22	学生によるプレゼン・松井氏講演会
15:49	学生によるプレゼン・伊井氏講演会
16:16	ディスカッション質疑応答
17:00	閉会

※終了時間は前後する可能性があります。

主催 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

 シンポジウム

ファッションにおける失敗

—ジェンダー、そしてデザインの否定芸術

【登壇者】

ニック・リーズ＝ロバーツ氏 (ソルボンヌ・ヌーヴェル大学教授)

【略歴】 フランス・パリのソルボンヌ・ヌーヴェル大学メディア・文化・コミュニケーション学部教授、及び芸術・メディア学部のファッション・クリエイティブ産業修士課程ディレクター。

専門は、ファッション研究、映画研究、ジェンダー・セクシュアリティ研究、現代メディア・カルチャー研究。著書に『Fashion Film： デジタル時代の芸術と広告』（2018年）、『フレンチ・キア・シネマ』（2008年／2014年）、『ホモ・エキゾチカス：人種、階級、キア批判』（2010年）の共著者、『アラン・ドロンの共編者： Style, Stardom and Masculinity』（2015年）、Isabelle Huppert: Stardom, Performance, Authorship（2020年）がある。

【逐次通訳】 小泉勇人氏（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授）

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2023年11月9日（木）15：20～17：00

【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント グローバルホール

【企画・コーディネーター】 高馬京子（情報コミュニケーション学部教授）

【使用言語】 英語（逐次通訳有り）

【来場者数】 85人

ジェンダー、そしてデザインの否定芸術

ファッションにおける失敗

11
9 (木)

開場 15:00 開講 15:20
終了予定 17:00

明治大学 駿河台キャンパス
グローバルフロント1階
グローバルホール

司会、コーディネーター:
高馬京子氏
(情報コミュニケーション学部教授)

逐次通訳:
小泉勇人氏
(東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授)

使用言語:
英語
(日本語通訳あり)

参加無料・事前登録
下記 URL または QR コードから
お申し込みください
<https://forms.office.com/r/nZQJkWhdv>

主催 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター



講師: ニック・リーズ=ロバーツ氏

フランス・パリのソルボンヌ・ヌーヴェル大学メディア・文化・コミュニケーション学部教授、及び芸術・メディア学部のファッション・クリエイティブ産業修士課程ディレクター。

専門は、ファッション研究、映画研究、ジェンダー・セクシュアリティ研究、現代メディア・カルチャー研究。著書に「Fashion Film: デジタル時代の芸術と広告」(2018年)、「フレンチ・クワイア・シネマ」(2008年/2014年)、および「エキゾチカス・人種・階級・クワイア批判」(2010年)の共著者、「フランドロロジ」の共編者、「Style Stardom and Masculinity」(2015年)、Isabelle Huppert Stardom, Performance, Authorship (2020年)がある。

ファッションにおける失敗

ジェンダー、そしてデザインの否定芸術

2023/11/9 (木)

15:00 開場 15:20 開講
17:00 終了予定

明治大学 駿河台キャンパス
グローバルフロント1階
グローバルホール

タイムスケジュール	
15:20	開会挨拶、司会者紹介
15:25	講演会
16:25	ディスカッション 質疑応答
17:00	閉会

※終了時間は前場のみ場合があります。

主催 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター gender@meiji.ac.jp

報告: 高馬 京子

2023年11月9日、駿河台キャンパス・グローバルホールでシンポジウム「ファッションにおける失敗—ジェンダー、そしてデザインの否定芸術」を開催した。講師に仏・ソルボンヌ・ヌーヴェル大学メディア・文化・コミュニケーション学部教授のニック・リーズ=ロバーツ氏を招き、逐次通訳に東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授の小泉勇人氏に依頼した。情報コミュニケーション学部生など85人が聴講した。

リーズ=ロバーツ氏は、デザイナーやファッションレーベルが廃業したり、ファッションから離れたりするという「失敗」がなぜ起こるのか、デザイナーがそれらの「失敗」をどのように管理するのかといった話題について、ジェンダーやセクシュアリティ、人種等の文化的アイデンティティの問題と関連付けながら話題を展開した。

今日のデザイナーは、「クリエイティブ・ディレクター」、つまりブランドの商業的要求にクリエイティビティを合わせるコミュニケーションターとして、業界によってより頻繁に宣伝されている。本講演では、このような(男性を中心とする)ファッションデザイナーによって提案されるデザインにおける失敗に関する個々の歴史と、伝統的なファッションシステムの問題、美的な不完全性、構造的な崩壊に焦点を当てて、成功やセレブリティの促進に投資され、誰も失敗することができないファッション業界の構造的断層を解き明かしたうえで、現代のファッションシステムにおいて様々なレベルでジェンダーとクィアネスの両方がい

かに重要な要素であるかを検討した。これら、ジェンダーとクィアネスに焦点をあてながら、なぜデザイナーやレーベルは廃業したり、ファッションから離れたりするという失敗がおこるのか、また、デザイナーはキャリアの中でどのようにそれらの失敗を管理するのかといった問いを皮切りに、ファッションシステムにおけるジェンダー、クィアネスについて検討しつつ、デザイナーやクリエイティブ・ディレクターとブランドとの間の権力闘争や緊張、デザイナーとブランドとの間の適合と不適合の問題についても考察を行った。

以上考察において、さまざまな事例や考えを紹介するとともに、現代ファッションが直面する問題を乗り越えるためにも最終的に「ファッションは必然的に『失敗』しなければならない」と結論付けた。

その後、デザイン面の「失敗」として、元来「エレガント」であった西洋の規範的な美意識をくつがえすものとしてみなされるとても醜いという意味をもつ「ファグリー“fugly”」という言葉や「かわいい」という特徴を提示しながらも、ジェンダーとファッション、商業とファッションなど、それぞれ切り離すことはできないが、改善されたほうが良い問題も抱えている題材を提示し、「失敗」ファッション、ジェンダーレスなファッションのトレンドに関する質問など、多数の質問が寄せられ、盛況のうちに終了した。

終了後のアンケートでも、「ファッションにおける失敗の定義や、資本主義的な商業的な制度がもたらした弊害について多角的な視点から考察する意見が聞けて面白かった」「実際にフランスの大学の講師の方が来て貴重な体験となった。」「ジェンダーとファッション、商業とファッションなど、それぞれ切り離すことはできない [中略] 問題も抱えている題材について興味深く拝聴した。」「(白人男性のデザイナーが多いという指摘に対し) 人種や性別による理不尽な差別があるとすれば、それは改善されてほしい点だと感じました」など、リーズ＝ロバーツ氏の講演を通して、ファッションとジェンダーの見方を学んだ様々な意見がよせられた。

本講演は、ジェンダーを考える際に、ジェンダーアイデンティティを外面的に構築する一要素としてのファッションに着目し、ファッションを通して考えるジェンダーを検討する可能性を感じさせた講演であった。また本講演におけるフランスの大学に所属するイギリス人としての研究者がもつ、西洋のファッションブランドをジェンダーとの関係性においてクリティカルに分析する視座は、現在の西洋におけるファッションとジェンダーの研究の重要な可能性をわたしたちに示唆してくれたが、それらを東アジアに住まう私たちがどうみて、考えるべきなのか、今後考えるべき宿題を受講者に与えてくれたといえるだろう。また西洋のファッションを牽引するデザイナーが男性であることが多いなどジェンダーバランスの問題も挙げられている。

このように、現代社会におけるジェンダーについて、現代ファッションを通して検討するこの報告はジェンダーセンターで開催するのに意義深い講演であったと考える。



講演するリーズ=ロバーツ氏



(左から) 質問に答えるリーズ=ロバーツ氏、小泉准教授、高馬教授



科学の世界をフェミニズムがひらく？

—フェミニズム科学論の可能性と課題—

【登壇者】

飯田麻結氏 (東京大学教養学部教養教育高度化機構 D&I 部門特任講師)

【略歴】 論文に「フェミニズムと科学技術 理論的背景とその展望」(『思想』2020年3月)、「感情／情動のポリティクス」(『現代思想』2020年3月)など。訳書にサラ・アーメッド著『フェミニスト・キルジョイ—フェミニズムを生きるということ』(人文書院、2022年)。

鈴木和歌奈氏 (大阪大学人間科学研究科講師、アムステルダム大学客員研究員)

【略歴】 専門は、科学技術の人類学、科学技術論 (Science and Technology Studies)。最近は科学技術に加えて、環境問題にも関心を広げている。論文に「フラクタルな巻き込み—ウルシと人間の間を生じる『重要な他者性』」(文化人類学 88 巻第 2 号)、「Ecological Trap: Capturing the Potentiality of iPSC Cells in Japan」Social Analysis 66(2) など。

竹崎一真氏 (明治大学情報コミュニケーション学部特任講師)

【略歴】 専門はスポーツ社会学、カルチュラル・スタディーズ。現在は、スポーツ科学におけるジェンダー問題に関心を持っている。近著に『ゆさぶるカルチュラル・スタディーズ』(北樹出版、2023)、編著に『ポストヒューマン・スタディーズへの招待』(堀之内出版、2022) など。

【指定討論者】 渡部麻衣子氏

(自治医科大学医学部専任講師、ウプサラ大学客員研究員)

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2024年1月18日(木) 18:00~20:00

【会場】 オンライン (zoom ミーティング)

【企画・コーディネーター】 竹崎一真 (情報コミュニケーション学部教授)

【視聴者数】 35人

報告：竹崎 一真

科学をフェミニズム視点から考える「フェミニズム科学論」は、科学技術の発展が加速的に進む現代社会において極めて重要になっている。しかしながら「フェミニズム科学論」は、日本の文脈では、一般はもとより高等教育でもあまり知られていない。そればかりか、学術分野でもその広がりには十分ではない。そこで本セミナーでは、科学に対するフェミニズムの視点がなぜ、そしてどのように現代社会において重要なのかを、哲学、人類学、社会学の三つの分野から議論し、「フェミニズム科学論」の可能性と課題を広く示すことが目指された。

飯田麻結氏からは、「科学の世界をフェミニズムがひらく♀!」というタイトルで報告が行われた。飯田氏は、「フェミニズム科学論」という研究分野の存在は、「そもそも『フェミニズム』と『科学』が無関係なものとして捉えられてしまっている」ことを肯定しているという重要な問いを投げかけた。また、現在の加速する科学技術の発展“ゆえに”必要とされている現状に対しても疑問を投げかけ、「過去は単にはじめから『そこ』にあるわけではなく、未来も単に展開していく物事というわけではない——『過去』と『未来』は反復的に働きかけられ、現在進行形の空間—時間—物質のもつれ合いという反復的な実践を通じて包摂されている」というカレン・バラッドの言葉を引きつつ、「フェミニズム科学論」自体がいまになって求められているのではなく、歴史的な文脈から常に考えられてきたことであることを指摘した。

鈴木和歌奈氏からは、「細胞のケア：実験室でのフィールドワークから」というタイトルで報告が行われた。初期のころのフェミニズム科学論は、主に科学における男性中心主義、あるいは西洋中心主義に対する批判的アプローチを提供し、科学における女性の排除や白人以外の人種ないし西洋以外の民族の排除の問題について取り組んできた。ところが、近年のポストモダンやポストヒューマンの思想に感化されたフェミニズム科学論は、「人間」以外の排除の問題にも取り組むようになった。鈴木氏は、そのような視点から「人間」以外が科学の世界においてどのような存在として認識され、扱われるのかに注目することで、実験室での「人間」以外のものに対するケアが科学システムにおける重要な実践となっていることを示した。

竹崎一真は、「フェミニズム・スポーツ科学論の可能性—女性アスリートの月経管理技術を事例に—」というタイトルで報告を行った。スポーツに関する科学技術の向上は、近年目覚ましいものがある。なかでも、女性アスリートの月経にフォーカスしたテクノロジーは、女性アスリートの健康リスクを軽減し、ハイパフォーマンスを導くものとして期待されている。しかしその一方で、その技術にはプライバシーの問題や生権力の問題が内在している。こうした事例から竹崎は、フェミニズムの視点からスポーツ科学を考える視点(=フェミニズム・スポーツ科学論)の可能性と重要性を示唆した。

最後にディスカッサントの渡部麻衣子氏には、三つの発表の主旨を簡単にまとめてもらい、それぞれの発表に対する疑問点を投げかけ、発表者がそれに応答する形で本シンポジウムが終了した。

以上のように本シンポジウムでは、日本国内においてまだあまり注目されていない「フェミニズム科学論」を哲学、人類学、社会学という幅広い社会科学の視点から取り上げることで、「フェミニズム科学論」の重要性と可能性を議論することができた。フェミニズム科学論は、現代の加速的な科学技術の進展によってその重要性は増しつつあるものの、しかしその視座は決して今日的なものとして留まるものではなく、人間と科学の長い歴史の中で絶えず問わなければならないものであり、常にすでにフェミニズムが科学をひらく重要な視点になっている（きた）ことが示された。



(左上から時計回りに) ディスカッションする飯田氏、鈴木氏、渡部氏、竹崎氏



科学の世界を フェミニズムがひらく?

—フェミニズム科学論の可能性と課題

科学研究をフェミニズム視点から考える「フェミニズム科学論」は、科学技術の発展が加速度的に進む現代社会において極めて重要になっている。しかしながら「フェミニズム科学論」は、日本の文脈では、一般はもとより高等教育でもあまり知られていない。そればかりか、学術分野でもその広がりには十分ではない。そこで本セミナーでは、科学に対するフェミニズムの視点がなぜ、そしてどのように現代社会において重要なのかを、哲学、人類学、社会学の三つの分野から議論し、「フェミニズム科学論」の可能性と課題を広く示していきたい。

登壇者

飯田 麻結氏

東京大学教養学部教養教育高度化機構 D&I 部門 特任講師

論文に「フェミニズムと科学技術 理論的背景とその展望」(『思想』2020年3月)、「感情/情動のポリテクス」(『現代思想』2020年3月)など。訳書にサラ・アーメッド著『フェミニスト・キルジョイ—フェミニズムを生き出すということ』(人文書院、2022年)。

鈴木 和歌奈氏

大阪大学人間科学研究科 講師、アムステルダム大学 客員研究員

専門は、科学技術の人類学、科学技術論 (Science and Technology Studies)。最近では科学技術に加えて、環境問題にも関心を広げている。論文に「フラクタルな巻き込み—ウルシと人間の間に生じる『重要な他者性』」(文化人類学88巻第2号)、「Ecological Trap: Capturing the Potentiality of iPS Cells in Japan」Social Analysis 66(2) など。

竹崎 一真氏

明治大学情報コミュニケーション学部 特任講師

専門はスポーツ社会学、カルチュラル・スタディーズ。現在は、スポーツ科学におけるジェンダー問題に関心を持っている。近著に『ゆきふるカルチュラル・スタディーズ』(北樹出版、2023)、編著に『ポストヒューマン・スタディーズへの招待』(堀之内出版、2022) など。

指定討論者

渡部 麻衣子氏 自治医科大学医学部 専任講師

タイムスケジュール

18:00	開会挨拶 登壇者紹介
18:05	講演 (各25分×3)
19:20	休憩
19:25	指定討論者からの応答 および討論
19:45	フロアトーク (15分)

※終了時間は前後する可能性があります。

1/18 (木)

18:00 ~ 20:00

オンライン開催 (Zoom)

※どなたでも参加できます。

参加無料・事前登録

<https://bit.ly/47WRUij>

詳細は上記 URL、または
QRコードからご確認ください。



主催 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター 連絡先 gender@majji.ac.jp

他機関との連携・協力

■後援

『ケアとジェンダー』（全5回）

国際日本学部特別講義 最終回

国際日本学部特別講義 最終回

全5回 ケアとジェンダー

12/15 (金) 3~5限 (13:30~18:50) オンラインのみ

12/16 (土) 3・4限 (13:30~17:00) オンライン、会場ハイブリッド開催

1. ケアは「女の労働」か？
2. ケアの分配公正をめぐって
3. ケアすること/されること：当事者主権の立場から
4. 介護保険はケアの現場をどう変えたか？
5. 介護保険が危ない！ケアの制度を再設計する

最近、「ケア」という言葉をよく耳にするようになりました。育児・介護・看護……しかしその多くは今まで「女の仕事」とされてきました。そのケアの現場がしだいに変わりつつあります。そして、「結婚しない」「一人で生きる」という選択をする人も増えた今、若い皆さんにも、介護保険の設計や、あるべきケアの形は、他人事ではありません。日本における女性学の第一人者であり、ベストセラー『おひとりさまの老後』などの著作がある上野千鶴子先生をお迎えして、「ケアとジェンダー」の問題を考えます。

明治大学特別招聘教授としての上野千鶴子先生の特別講義は、今年で最後になります。




講師：上野千鶴子氏
東京大学名誉教授／
明治大学国際日本学部特別招聘教授。
日本のフェミニズム・ジェンダー研究の第一人者であり、2019年の東大入学式での祝辞が話題になった。主な著書に『おひとりさまの老後』『ケアの社会学』『近代家族の成立と発展』など。

司会・コーディネーター：藤本由香里氏
(国際日本学部教授)

参加無料・事前登録

どなたでもご参加いただけます。
詳細は下記URL、またはQRコードからご確認ください。



https://www.meiji.ac.jp/nippon/gjs_splecture_prof.ueno.html

オンライン、及び
明治大学 中野キャンパス
高層棟3階304教室

主催 明治大学国際日本学部 問合せ先 gjs@mics.meiji.ac.jp
後援 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

 研究プロジェクト

A 「企業のダイバーシティ推進の実態調査」

牛尾 奈緒美

今年度は、ロータリー国際大会がメルボルンで5月28日から5月31日まで開催されることに伴い渡豪し、現地に集う各地区ロータリーに所属する企業経営者や組織運営者と懇談、意見交換する機会を得て、各組織におけるダイバーシティ推進の実態や、現地社会の人種や性別等の多様性が経済発展に寄与している状況を見聞・視察することができた。また、ダイバーシティ推進に積極的に取り組む大手日本企業数社に対して大規模な従業員意識調査を実施し、回答をもとに実証研究を行い学会での発表や学術論文の執筆を行った。

具体的には本研究は、組織制度と人事慣行が包摂風土に与える影響とそれらに対する経営トップや職場上司のダイバーシティ・インクルージョン推進行動（D&I 行動）の調整効果を、1131名に対するアンケート調査結果にもとづき検証するもので、その結果、包摂風土の形成には、経営トップや職場上司のダイバーシティ推進行動に関係なく、ダイバーシティに関連した人事慣行が重要であること、経営トップのD&I行動は、組織制度や人事慣行の在り方とは独立的に、包摂風土の形成にとって重要であるということ、経営トップのD&I行動は組織制度の効果を高め、職場上司の行動は人事慣行の効果を高めること等が明らかになった。複数の企業で経年的に従業員意識調査の結果を蓄積してきており、今後も引き続き実証的な研究を行っていくことを計画している。さらに海外での知見やネットワークの構築も含め、多角的な研究につなげられるよう考えていきたい。

B 「欧州におけるファッション（服飾流行）とジェンダー表象に関する考察」

高馬 京子

本プロジェクトでは、その時代のジェンダーをめぐる課題とも密接に関係しているといえるファッションとファッションを通して構築されるジェンダー・アイデンティティについて、フランスを中心に欧州におけるファッションに焦点をあて考察をおこなった。

ファッションはジェンダーをめぐる問題を映し出すと同時に、内在化しているその社会のジェンダーにかかわる問題を明るみにだし時には社会変革を起こす力ももつものである。そのようなファッションとジェンダーをめぐる課題の関係性について社会的背景と関連付けて検討することを研究課題とする中、本プロジェクトとしては、その基礎研究として、歴史の変遷について考察をおこなうこと、また現代の欧州のファッションとジェンダーの関係について明らかにするため、講師に仏・ソルボンヌ・ヌーヴェル大学メディア・文化・コミュニケーション学部教授のニック・リーズ＝ロバーツ氏を招き、2023年11月9日、駿河台キャンパス・グローバルホールでシンポジウム「ファッションにおける失敗—ジェンダー、そしてデザインの否定芸術」を実施した。

元来、フランスのファッション実践に着目しても、宮廷社会におけるファッションの実践、19世紀におけるブルジョワジー台頭の中で、男性の富の象徴として女性が記号的消費を実践しファッションを身に纏う行為、20世紀の女性解放の動きと呼応して提案されるファッションなどが挙げられるがキーワードはエレガンス（上品さ）またグラマラスなどが使われていた。しかし現代ファッションの傾向として講演会報告でも記したように招聘したリーズ＝ロバーツ氏は、現在のファッションについて「失敗」をキーワードにジェンダーやセクシュアリティ、クイアネス、人種等の文化的アイデンティティの問題と関連付けながら議論を提示した。その結果、現代のラグジュアリー・ファッションの傾向の中にデザイン面の「失敗」として、元来「エレガント」であった西洋の規範的な美意識をくつがえすものとしてみなされるとても醜いという意味をもつ「ファグリー“fugly”」という言葉や「かわいい」という特徴が多くみられる様子を提示した。このように、それまでとは異なり、ファッションを通して構築されるアイデンティティの多様化の傾向がみられる時代に、その多様性を映し出しつつも、その変化をファッションそのものが先導していく様子も伺えた。ファッションを通して提言されるジェンダー・アイデンティティを通してその時代、社会が抱えるジェンダーをめぐる課題が映し出され、かつそれを提言し推進されることが見受けられた。今後の研究課題としては、それらを日本で受容するときに、どのような意味作用がもたれたのかについて検討していく予定である。



C 「生殖技術の進展と女性アスリートのライフコース変容」

竹崎 一真

本研究プロジェクトでは、スポーツ科学をフェミニズム視点から分析する「フェミニズム・スポーツ科学論」を手掛かりに、三つの事例について研究を行った。

第一の事例は、女性アスリートの月経管理アプリである。2021年に日本国内で女性の健康管理を行うテクノロジー「フェムテック」が注目を集めて以降、スポーツ界でも関心が高まっていた。なかでも月経管理を行うアプリは、チームマネジメントの重要な手段として認識され始めている。本研究では、スポーツ界における月経管理アプリに関するメディア言説の分析を行うとともに、実際に使用しているチームの監督へのインタビューを行った。その成果を、科学技術社会論学会の学会大会にて報告した。

第二の事例は、女性アスリートの卵子凍結である。女性アスリートの平均引退年齢は、男性アスリートに比べて早く、その背景には妊娠・出産という女性特有のライフコースがあるとされている。女性アスリートの持続可能なキャリア支援は、今日のスポーツ界において喫緊の課題である。そうしたなかで注目されているのが卵子凍結である。欧米におけるいくつかのスポーツ団体では、所属するアスリートが卵子凍結にアクセスしやすいような制度作りを行っている。そこで本研究では、欧米と日本のスポーツ界における卵子凍結をめぐる状況を整理し、欧米と日本の差異を分析した。その成果は、スウェーデンのウプサラ大学とのオンライン研究セミナーにて報告した。

第三の事例は、スポーツ科学におけるテストステロンである。テストステロンは一般的に「男性ホルモン」と呼ばれ、男性をより逞しくする物質として考えられている。ところが、近年の運動生理学などの研究分野では、テストステロンは必ずしも筋肥大に好影響を与えないとする指摘がなされるようになった。また近年ではテストステロンをめぐる言説が、男性身体ではなく、トランスジェンダーや高アンドロゲン症の女性身体をめぐる問題と強く関連付けられている。そこで本研究では、スポーツ科学におけるテストステロンの認知に関する歴史を整理し、トランスジェンダーや高アンドロゲン症問題とどのように関連付けられるようになったのかを分析した。その成果は、日本スポーツ社会学会の研究セミナーにて報告した。



D 「ジェンダー・ノンコーフォーミングをめぐるパフォーマンス・アートの電 子アーカイブ化」

大島 岳

1990年代から2000年代にかけてのアート・パフォーマンス、なかでもドラッグ・クィーンパフォーマンスは、日本のHIV/エイズアクティヴィズムを中心としたクィア・アクティヴィズムにおいて重要な役割を果たしてきた(大島 2023)。なかでもメディア・アーティスト集団ダムタイプを結成した古橋悌二は、1986年からニューヨークでドラッグ・パフォーマンスをはじめ、帰国後1989年から京都でクラブイベントをシモーヌ深雪とはじめ、自身のHIV陽性判明以後アート・アクティヴィズムを実践し、鑑賞のアートではなく社会の変革をめざしいくつもの実験的な試みを行ってきた。先行研究では、古橋やダムタイプの表象分析や解説は多数あるが、その後古橋の遺志や想いが、どのように継承され、ネットワークを広げながらアクティヴィズムとしてアートが展開されてきたかの解明は、現在でも課題として残されている。

本研究では、古橋と親交があった東京を中心に活動するパフォーマンス・アーティストに焦点を当て、バイオグラフィーからジェンダー・ノンコーフォーミングと表現についての記録を保存し分析を行う。そのうえで、ジェンダー／セクシュアリティをめぐる日本社会の課題に対し、社会の周縁に置かれた者がどのように苦悩や希望を表現し他者をつなぎ、どのようなメッセージを発してきたかという個人に立脚した社会学的研究を行うことを目的とする。そのキックオフとなる本年度は、科研で行っている生活史の聞き取り調査と併行し、これまでの作品を収めたメディア(VHSビデオテープ)や紙媒体のフライヤー等が30年近く経過した現在、劣化ないし消失を防ぐ目的で、電子化をおこない基礎資料の一部整備を行った。

研究成果の一部の発表として、オーストラリアのメルボルンで行われたXX ISA World Congress of Sociologyにおいて、2023年6月29日に研究発表を行なった。また、拙著『HIVとともに生きる——傷つきとレジリエンスのライフヒストリー研究』(2023年11月29日発行)および Gaku Oshima, 2023, "Societal Envisioning of Biographical AIDS Activism among Gay People Living with HIV in Japan," *Historical Social Research*, 48(4) 304-329.に研究成果の一部を発表した。

 業績一覧

*****論文*****

- 牛尾奈緒美, 2023, 「コーポレート・ガバナンス改革におけるダイバーシティ推進の意義と企業内の価値創出のメカニズム」『日本経営学会誌』第 53 号 (経営学論集第 93 集) 2023 年 7 月, pp.74-83.
- 牛尾奈緒美, 2023, 「組織制度と人事慣行が職場の包摂風土に与える影響—ダイバーシティとインクルージョン推進行動の調整効果—」(2023)牛丸元・高木俊雄・牛尾奈緒美『ビジネス科学研究』(12),pp.21-30.
- Shimada, Go. 2023, "Is Kaizen Effective in Developing Countries? The Universality and Distinctiveness of Kaizen." *Journal of International Development Studies* 31 (3): 9-20.
https://doi.org/10.32204/jids.31.3_9.
- 竹崎一真, 2023, 「創られる理想、作られる身体：私たちはどのようにボディ・プロジェクトへと向かうのか」『ゆさぶるカルチュラル・スタディーズ』(稲垣健志編) 北樹出版.
- 竹崎一真, (近刊), 「『SNS』はアスリートが作る?」『スポーツで社会学する』(石岡丈昇・山本敦久編) 有斐閣.
- 竹崎一真, (近刊), 「健全な身体に健全な精神は宿らない?」『スポーツで社会学する』(石岡丈昇・山本敦久編) 有斐閣.
- Gaku, Oshima. 2023, "Societal Envisioning of Biographical AIDS Activism among Gay People Living with HIV in Japan," *Historical Social Research*, 48(4): 304-329.
<https://doi.org/10.12759/hsr.48.2023.49>
- Takeshi, Miwa. Masazumi, Yamaguchi. Tomoko, Ohtsuki. Gaku, Oshima. Chihiro, Wakabayashi. Sachiko, Nosaka. Kanna, Hayashi. Yuzuru, Ikushima. Masayoshi, Tarui. 2023, "Associations between Drug Use and Sexual Risk Behaviours among Men Who Have Sex with Men in Japan: Results from the Cross-Sectional LASH Study," *International journal of environmental research and public health*, 20(13).

*****著書*****

- 牛尾奈緒美, 2023, 序文『デジタル社会の多様性と創造性』田中洋美・高馬京子・高峰修編著 (明治大学出版会発行) 丸善出版.
- Shimada, Go. 2023, "Does Aid Make Africa Resilient?: Disasters' impacts on economic growth, agriculture, and conflicts. ." In *Reconsidering Resilience in African Pastoralism Toward a Relational and Contextual Approach*, edited by Shinya Konaka, Peter D. Little and Greta Semplici. Kyoto: Kyoto University Press and Trans Pacific Press.
- 島田剛, 2024, 「第 1 章 援助でアフリカはレジリエントになるか?— 気候変動による災害が経済成長、農業、紛争に与える影響」湖中真哉、ピーター・リトル、グレッタ・グレッタ・センブリシ編『レジリエンスは動詞である：アフリカ遊牧社会からの関係／脈絡論アプローチ』京都大学出版会 (上記、書籍の日本語版)



大島岳, 2023, 『HIV とともに生きる——傷つきとレジリエンスのライフヒストリー研究』
青弓社.

大島岳, (近刊), 「伝わることば—エイズ・アクティヴィズムにおける「手紙」(仮題)」,
好井裕明他編『ボーダーとつきあう社会学』風響社.

大島岳・久保優翔, (近刊), 「グローバル東京をクィアする——週末に新宿二丁目で働く
(仮題)」, 堀川祐里編『労働環境の不協和を乗り越える——労働と生活のジェンダー
分析(仮題)』晃洋書房.

*****コラム・エッセイ・取材記事・講演録等*****

Shimada, Go, 2022, "Food aid is not helping Africa's struggle with climate change: what
would? ." *Economy, Land & Climate Insight*. [https://elc-insight.org/food-aid-is-not-
helping-africa-cope-with-climate-change-what-would/](https://elc-insight.org/food-aid-is-not-helping-africa-cope-with-climate-change-what-would/).

島田剛, 2023, 「書評「山形辰史著(2023)『開発経済学 — グローバルな貧困削減と途上国
が起こすイノベーション』、中央公論 — 開発協力大綱の「現実」とどう向き合うか」、
『国際開発研究』第32巻第2号 pp.71-75.

佐藤仁・長畑誠・牛久晴香・島田剛, 2023, 「国際開発学会 第33回全国大会プレナリーシ
ンポジウム グローバル危機にどう向き合うか: 国際開発学の役割」、『国際開発研究』
第32巻第1号 pp.83-94.

大島岳, 2023, 「文献紹介 多賀太(著)ジェンダーで読み解く男性の働き方・暮らし方——
ワーク・ライフ・バランスと持続可能な社会の発展のために——」家族社会学研
究 35(1):92-92.

大島岳, 2023, 「文献紹介 千代田区地域振興部国際平和・男女平等人権課著『千代田区女性
史(1996~2020)』』総合女性史研究 40.

*****学会発表・報告*****

牛尾奈緒美, 2023, 「ダイバーシティマネジメント行動が包摂風土や制度認知に与える影響」
牛丸元, 高木俊雄, 牛尾奈緒美『ビジネス科学学会全国大会』2023年6月17日, 明治
大学駿河台キャンパス.

竹崎一真, 2023, 「テストステロンの科学はどこへ向かうのか—多様化・多義化する「男性
的」な物質の社会学—」日本スポーツ社会学会研究委員会主催研究セミナー, 2023年
12月17日, オンライン開催.

竹崎一真, 2023, 「女性アスリートのチームマネジメントと月経管理をめぐる ELSI」日本
科学技術社会論学会学会大会, 2023年12月10日, 大阪大学.

Takezaki, Kazuma, 2024, 'The study of the Discourse on Egg Freezing Technology in
Sports' "Thoughts on Technology for Women's Bodies in Aging Societies-But whose
body are we talking about?" The JSPS Grants-in-Aid for Scientific Research Online



Seminar, 20th February 2024.

Gaku, Oshima, 2023, *“Words” that Communicate: Queer Performances as Public Health Activism*, XX ISA World Congress of Sociology, 2023 年 6 月 29 日, Melbourne Convention and Exhibition Centre.

Gaku, Oshima, 2023, *Continuing to Face the Unpredictable: Fukushima as a City Laboratory for a New Way of Life* XX ISA World Congress of Sociology, 2023 年 6 月 30 日, Melbourne Convention and Exhibition Centre.

大島岳, 2023, 「災禍とオーラルヒストリー (2) —新しい生き方に向けた小高の社会構想をめぐる声の力」第 21 回日本オーラルヒストリー学会大会, 2023 年 11 月 12 日, 琉球大学.

戸ヶ里泰典・井上洋士・高久陽介・大島岳・阿部桜子・細川陸也・塩野徳史・米倉佑貴・片倉直子・山内麻江・河合薫・井上智史・関由起子・若林チヒロ・大木幸子, 「HIV 陽性者に対するうつ傾向に対するソーシャルサポートネットワークの関連性」第 37 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2023 年 12 月 3 日, 京都リーガロイヤルホテル.

戸ヶ里泰典・井上洋士・高久陽介・大島岳・阿部桜子・細川陸也・塩野徳史・米倉佑貴・片倉直子・山内麻江・井上智史・河合薫・関由起子・若林チヒロ・大木幸子, 「HIV 陽性者におけるうつ傾向に対するスティグマの認知およびソーシャルサポートの関連性」第 37 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2023 年 12 月 4 日, 京都リーガロイヤルホテル.

加藤力也・大島岳・牧原信也・生島嗣「HIV 陽性者のための就職支援セミナーに関する考察」第 37 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2023 年 12 月 4 日, 京都リーガロイヤルホテル.

大島岳・加藤力也・牧原信也・生島嗣, 「コロナ時代に求められる新たなピアサポートに向けた取組み」第 37 回日本エイズ学会学術集会・総会 (京都) 2023 年 12 月 4 日, 京都リーガロイヤルホテル.

*****メディア出演・講演等*****

牛尾奈緒美, 2024, 「企業組織における人材の多様性推進と女性活躍の重要性について」(2024)税理士会四谷支部主催新年講演会, アルカディア, 2024 年 1 月 22 日, 13 時~15 時 30 分.

牛尾奈緒美, 2023, 特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント: MPower Partners ゼネラル・パートナー キャシー松井氏、コモンズ投信(株)代表取締役社長兼最高運用責任者 伊井哲朗氏」企画・ファシリテーター, 明治大学駿河台キャンパスリバティタワー1156 教室, 2023 年 10 月 23 日, 13 時 30 分~15 時.

牛尾奈緒美, 2023, パネルディスカッション「地域の創生 中国・四国 G1 サミット: G1 の考える中国四国の未来~政治・経済・教育・メディアの側面から考える」全大会におけ



るモデレーター『第3回 GI 中国・四国サミット in 松江』2023年9月23日, くにびき
メッセ(松江市).

牛尾奈緒美, 2023, ラジオ出演「見事なお仕事」(TBS ラジオ) 社会課題を考えるきっかけ
に。大学生がつくったのは「地域のためになる」公共喫煙所, 2023年9月9日, Podcast:
見事なお仕事『二子玉川の喫煙所の秘密』<https://www.tbsradio.jp/articles/74911/>

ジェンダーセンター運営委員一覧

○委員長

牛尾 奈緒美

○副委員長

宮本 真也

○学部内運営委員

施 利平

高馬 京子

島田 剛

竹崎 一真

大島 岳

○学部外運営委員

高峰 修（政治経済学部）

○学外運営委員

出口 剛司（東京大学）

細野 はるみ（名誉教授、元ジェンダーセンター長）

ジェンダーセンター運営委員会会議録

第1回運営委員会 2023年6月21日

第2回運営委員会 2023年10月31日



編集後記

世の中の状況は、あるときから常に「危機」である。コロナ禍がややおさまったかと思えば、ロシアによるウクライナへの侵攻から2年もたち、ハマスによる攻撃をきっかけとして開始されたイスラエルとの戦闘状態は、特にパレスチナのガザ地区の住民に対する非人道的な状況は深刻を極めている。そして、危機において犠牲になるのは、子どもであったり、女性であったりすることが多い。私たちのセンターのアクチュアリティは、これらの問題にも一つの視角をもたらすことでもあるだろう。そういった取り組みができないか、今後、考えていきたい。

ジェンダーセンター運営委員・副センター長 宮本 真也

コロナの影響ですべてオンラインでしかできなかった講演会、研究会などのイベントが今年は本格的に対面でできるようになった。これにより、対面で集い講演を聞き直接登壇者に質問ができる、という昨今あたりまえではなくなっていたことが「あたりまえのもの」として戻ってきてその大切さを再認識させられた。それでも遠方でも気軽に参加できるオンラインの講演会、研究会などの意義もあるだろう。このように、対面、オンラインという二つのやり方を駆使しながらこれからもジェンダーセンターの活動をより発信できればと思う。

ジェンダーセンター運営委員 高馬 京子

今年度は新型コロナウイルス感染症が5類になったことで、対面のイベントがメインとなりました。海外から招聘した先生の講義も2件あり、以前とほぼ同様になったと思います。実施されたどのイベントも開催主旨について関心の高い学生が多く参加しており、「ジェンダーに留まらず社会に存在するさまざまな差異や多様性への気づきを促し真の共生社会の誕生に寄与（ジェンダーセンターHP「センター長ご挨拶」より）」するための活動となっていたのではないかと感じています。ご登壇いただきました皆さま、運営委員の先生方、参加者の皆さまに、深く感謝申し上げます。

来年度も、一層深化した研究が参加者の気づきを促す機会となる、そのための一助になれるよう運営を続けて参ります。

ジェンダーセンター事務局

ジェンダーセンター年次報告書（2023年度）

- 2024年3月31日発行
- 編集・発行 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
- 印刷 株式会社プリントパック